

黙々として、數十年間一貫した主題の下に、一貫した研究方法でつらぬかれた著者の眞學な學究的態度は、いまこの書物を手にして、あらためてわれわれ後學の發奮をうながすものがある。敢へて東洋の考古學に專念する人にかぎらず、ひろく諸學の士に一讀をすゝめたいとおもふ。(塵右室刊行會刊、菊版五四二頁圖版八一、定價七・五〇)(水野清一)

古銅器形態の考古學的研究

梅原末治著

能動的な發掘調査の方法と解き離しがたく結びついた近代の考古學研究をしばらく措くならば、古代の遺物に對して考古學的な解釋を試みることは、支那において先づはじめられたといふも過言ではあるまい。われわれは既に宋代において古銅器に關する著錄の類を見るのであつて、今日ひとり支那學者のみならず、世界の學究の關心をこゝにあつてゐることの淵源の古きを知るのである。

かくの如く古き研究の歴史を有する支那古銅器は、世界の考古學界において、また他の視點より見ても特殊な地位を占めてゐる。即ち考古學上における年代決定の規準として、普通に用ひられる利器または容器による區分のうち、容器としてはいづれの地においても土器によることが多いのに對して、支那考古學にあつては、史前の彩文土器から漢陶に至る永い期間を、土器の推移によつて鮮明する方法は未だ成功してゐない。かへつて、今日ほ明

らかにせられてゐるこの間における青銅器の變遷觀を、これに代るものとして有するのであつた。支那考古學上における古銅器研究の價値の特に大なる所以である。

しかしまた、今日われわれの聞知せる支那古銅器の變遷觀なるものも、その永き傳統にもかゝはらず金文に對する特殊な關心に驅されて、幾多の僞銘の器を無批判に集載した中國人の著錄や、それらに基づいて進められた方氏一派の研究を是正して、眞に據るべき學說の體系とするには不十分なるものであることは否みがない。

こゝにおいて先に戰國式銅器の集大成を終へられた著者が、邁つて所謂三代の古銅器に關する東方文化研究所における研究成果の一部を公にせられたことは、特に著者が實査せられた確實なる資料のみによつて、——しかもそれは極めて多數に上る——研究を進められたといふ一事のみを以てしても、はじめて支那古銅器に關する信據すべき著作を得たといふ學界共通の喜びをおほふことが出来ない。

さて著者が本研究に際して使用せられた資料の性質は、一部に安陽殷墟の出土と目ざるゝものをはじめとし、山西李峪村・河南新鄭・安徽壽縣・河南洛陽その他の地域的一括遺物を含んでゐるが、なほ多くは發見の時と所とを異にせるいはゞ遊離資料ともいふべきものであつた。従つてこれが研究は必然的に、發掘に重きを置く考古學的研究の方法に對して、純粹な形式學的研究を以て一貫せられ、その處理において方法論的にも一の典型を展示せ

られることとなつたのである。

即ち本書の第三章は、從來古禮經に見ゆる器名によつて呼ばれてゐた形態分類の必然性を認めつゝも、學的に純粹なる立場を築くためにこれを排して、容器の形態として普遍的な名辭のもとに再編成せられた分類觀を以て器形の別を考へ、これを十三類二九種に統一せられた經過の記述に當てられてゐる。次いでかくの如く分類せられた個々の形態が、他の形態に對しては自己を固定化してゐる半面、それ自體のうち形を變化を含む事實によつて、形式列の考定の可能を認め、第四章においてこの動向を一々について説明してゐる。個々の器形別に編輯せられた圖版寫眞の配列が、かゝる觀點によつて組成せられてゐることは、いふまでもない。

かくの如く個々の器形に分離せられ、各々のうちにおいて形式列を認められたものに對して、これを古銅器全體としての形式列にまでまとめようとするのが第五章前半の内容である。こゝでは器形を異にするものうちにも地域的一括遺物として同時的存在を考へ得るもの、銘文・圖文等を同じうするもの、更に器體・器形の細部に類似を示すものなどによつて、器形別の形式列間の横の關係が考察せられてゐる。かゝる過程を経て著者が先に得られた個々の器形の形式列が相互に矛盾するものでないこと、換言すれば全體としての古銅器の相對的年代觀を導くに足るものであることを自證せられた。同章の後半はこの相對的年代觀を實年代觀にまで推し、める處理の素描に當てられてゐるが、こゝでも資

料の吟味不十分なる理由によつて從來の中國學者の銘文による年代想定を退け、先づ紀年銘ある銅器の諸例が著者の形式列の最下限を示すに役立つことを明らかにし、上限を殷墟の出土品によつて殷代の後半に求め、且つその形式列の後半を占めるものが戰國式銅器に他ならぬことを述べて、一應の解明を果たされたのである。

聞くところによれば著者の支那古銅器の研究は、形態・文様・銘文の三方面より論攷せられる計畫であるといふ。従つて本書に説かれたところといへども、——ことにその實年代觀などに、他日更に修補せられ精密さを加へるものがあることが期待せられ、本書の價値もまたその三部作完成の日において一段と光彩を増すべきものであることが思はれる。しかもそれは本書が今日において學界の期待しうる最高の支那古銅器研究の段階を誇示するに足るものと見ることをさまたげないのであらう。本書の結論として掲げられた、これらの古銅器の形態が容器としては非實際的な形から實用的なものへと推移して行つた事實と理由とを、木器の先行によつて考へ、禮の盛衰によつて説かうとせられるが如き著者の見解もまた、現在の段階におけるものとして最も興味深く讀まれるものである。(東方文化研究所發行、四六四倍版、本文五三頁 圖版五〇、定價拾五圓)(小林行雄)

河南安陽遺寶

梅原末治編